

Plutonium

Winter 2009 No.64



オピニオン

核兵器の予算を温暖化防止に
核より怖い地球温暖化

インタビュー

原子力発電先駆けの地

—豊かな自然と共に発展する富岡町—
—遠藤勝也 富岡町長インタビュー—

社団法人 原子燃料政策研究会

Plutonium

Winter 2009 No.64

オピニオン	1
核兵器の予算を温暖化防止に 核より怖い地球温暖化	
インタビュー	2
原子力発電先駆けの地 — 豊かな自然と共に発展する富岡町 — 遠藤 勝也 富岡町長インタビュー	
冥王星 ⁶²	10
歴史って人間ということ	後藤 茂
いんふぉ・くりっぐ	
六ヶ所再処理工場竣工は8月	8
浜岡1、2号機運転終了	
— 新たに6号機を建設へ	9
安全委 — 柏崎刈羽7号機の安全機能 —	
損傷なし	9
川内3号機増設申し入れ	9

Plutonium は、インターネットで日本語版、英語版がご覧
なれます。

ホームページ  <http://www.cnfc.or.jp/>



京都大原・三千院 往生極楽院 (982年建立)

御堂内、中央に阿弥陀如来、右に観世音菩薩、左に大勢至菩薩、いずれも座られ、1千年を超えて人間の右往左往を
ご覧になってこられた。

核兵器の予算を温暖化防止に 核より怖い地球温暖化

人類の祖先は、13万年前頃にアフリカに出現したというのが大方の学説である。その後、そのホモ・サピエンスたちが地球上に広がり、今日に至った。それぞれの地域に散った人類は、その環境に順応し、肌の色、目の色などが変化した。食べ物にも順応して例えばインスリンなどの内分泌物の量の違いが生じた。近年では食文化に順応して身長、体重の変化、容姿や体型も多様化したと言われる。

書く必要もないことだが、人類の起源を辿れば、肌の色、居住地域、国境、またキリスト教徒、イスラム教徒、仏教徒、ヒンズウ教徒などの宗教などで人間を区別するべきではないことは当然だ。人類67億6千万人は全て親戚なのだ。核兵器は、私どもの親戚を無差別に大規模に殺害する最強兵器であり、それを開発、配備、そして何時までも維持することは、もう抜本的に考え直す時期にきている。

1970年3月のNPT発効時に、米国、ソ連（ロシア）、英国、仏国、中国の5カ国であった核兵器国は、インド、パキスタン、北朝鮮、そして保有していると考えられるイスラエルを含めて、現在は9カ国である。廃絶したとする南アフリカ、1991年のソ連邦崩壊時にロシアに全てを引き渡したとするウクライナなどの疑惑国をも含めると、2桁になる。さらに現在も核開発を進めている国がある現実を直視すれば、いまだに核拡散が進んでいると言わざるを得ない。しかも元を正せば、核兵器国からの技術、物質、設備、そして技術者の拡散が起因し

ている。

なぜそのように核兵器を持ちたがるのだろうか。核兵器の保有数は、米国、ロシアがそれぞれ4～5桁、英国、仏国、中国が3桁、イスラエルが2～3桁、インド、パキスタン、北朝鮮が2桁、合計約23,000発と、多くの機関が予測している。人間が人間を、人がその親戚を大量に、しかも何回も殺す事ができる兵器がなぜ必要なのか。

核兵器よりも遙かに怖い現象がある。それは地球温暖化である。小誌でも何回も取り上げているが、地球温暖化がこのまま進めば、海水の温度もさらに上昇し、温暖化促進物質の一つであり、しかも大量に海底に存在するメタンハイドレート中のメタンが大気中に放出されることになる。その放出が進めば、炭酸ガスの20倍もの温暖化効果のあるメタンにより、さらに温暖化が進み、人間には抑制できない地球温暖化への悪循環が始まる。すなわち、大気に放出されたメタンが温暖化を早め、それがまた海底のメタンハイドレート中のメタンを大気中に放出させるという連鎖反応が引き起こされる。その結果、200年で人類は窒息死することになると、当研究会会長の西澤潤一先生は警告する。最悪の場合80年ということだ。海底のメタンハイドレートは、そのまま静かに海底で眠り続けてほしいし、安易に石油代替エネルギー資源として開発するなど考えない方がよい。

この温暖化の悪循環は、過去にもその例があるとされている。2億6千年前の古生代と中生代の境目（P-T境

界）がそれで、その時には古生物学上、最大級の古生物の大量絶滅が発生したことで知られている。6,500万年前の隕石の衝突による恐竜の滅亡の、一つ前の地球の大事件である。

米国発の、百年に一度の世界経済危機と言われている今、経済対策が先行し、地球温暖化防止対策の陰が薄れたように見える。わが国の今国会でも地球温暖化防止対策についての議論はほとんど聞かれない。しかし、着々と地球の温暖化は進んでいる。この際、思い切って核兵器の開発、維持の費用を地球温暖化防止のために使ったらどうだろうか。自国民を守るためと称する核兵器を減らし、あるいは廃絶し、その開発・維持費用を地球温暖化防止対策に使えば、自国、あるいは同盟国の人間ばかりでなく、人類全てを救うことになる。温暖化防止が上手くいけばだが。

まずは核廃絶の先駆けとして、歴史に残るその偉業を、英国と仏国で実施することをお勧めする。社会主義国ソ連の崩壊で、両国は核兵器の管理・保管に困っているのではないだろうか。経済的波及効果のない無用の長物であり、世界の二極化の過去の象徴としての核兵器を廃棄し、その管理・保管費用を地球温暖化のために使用することは、世界中の人々が大歓迎するだろうし、両国に対する国際社会の評価は大いに向上するに違いない。また、核不拡散のための最も大きな施策ともなる。

(編集部)



原子力発電先駆けの地 — 豊かな自然と共に 発展する富岡町 —

遠藤 勝也 富岡町長インタビュー



福島県双葉町、大熊町、富岡町、楡葉町には、東京電力（株）福島第一、第二原子力発電所があります。昭和45年（1970年）11月17日に最初の原子炉が運転を開始して以来、現在では合計10基の発電所が運転を続けています。2007年7月の新潟県中越沖地震が生じてからは、柏崎刈羽原子力発電所が運転停止しているため、東京電力の原子力発電所としてはこの地域の発電所ががんばって発電を続けています。

今年2月4日、福島第二原子力発電所が立地する富岡町を訪ね、遠藤勝也町長のお話を伺うことができました。（編集部）

大企業が？あり得ない！

—この町に原子力発電所が建設され、運転中に関しましてもいろいろとご苦労はあったと思いますが、町長のご感想は。

【遠藤町長】 この町の基幹産業は、もともと農業です。自然がいっぱいです。全てあります。ないものはありません。海、川、山、森、本当に素晴らしい自然が整っている町です。食品は、野菜も米もおいしいですね。これだけは誇りですね。

私が町長になって12年目です。12年の在職中にはいろいろな事がありました。でも現在はしっかりと安全、安定運転をしています。これをたいへん高く評価しています。ただ、平成

14年に明らかとなった検査データ改ざんの不祥事については、原子力の歴史上たいへんな不祥事、不正発覚であり、日本の原子力発電所の盲点をさらけだしました。欧米とはちょっとそのような点で遅れていたという意味で残念でした。これが払拭され、膿を出し尽くしたということでしょうか、かえって日本の原子力の行政、原子力全体の大きな財産として構築されていくのではないかと私は思いますね。

—その時、大々的な新聞報道もあり、町の方々も不安になったのではないのでしょうか。町長も大変だったと思いますが。

【遠藤町長】 本当に大変な衝撃で、ど

ん底になりましたね。いままで電力会社を信頼していました。この地域との共生そのものでしたから。考えもしないことが露呈し、我々に嘘をついていた、こんなことはあり得ない、あの大企業が。大変な心理的なダメージでした。原子力発電所のそのようなデータの改ざんなど、その他にもいろいろな不正を全て隠蔽したということだろうか、本当に大丈夫なのだろうか、と。

世界にはいろいろな原子力発電所の事故がありました。米国のスリーマイルアイランド原子力発電所（TMI）事故、当時ソ連のチェルノブイリ発電所の事故等々、これは対岸の火事ではないと不安のどん底に落とされましたね。

それを契機に、しっかりと素直に情報公開がされるようになり、もう6年半になります。事業者がよくがんばって体質改善されたなと思います。まさによろやく我々が信頼できる、また首都圏に電力をしっかりと供給する役割を果たしてくれるだろうという雰囲気、町民も持つようになってきた

※プルサーマル：ウランとプルトニウム混合燃料を取り替え燃料として原子力発電所で使うこと。従来はウランのみの燃料を装荷していた。プルトニウムは原子炉内で作られたリサイクル燃料。

のは事実です。ですから今回、福島県と東京電力とのプルサーマル*の問題でも、地元4町が議論に議論を重ね、検証しながら、「事業所も体質改善がされ、信頼が育ってきているし、国も制度を含めて保安規制の役割もしっかりと担ってきている。国と事業者が私ども地元に対しても安堵感を与えてきており、日本の原子力行政は生まれ変わった」との認識が生まれています。私もそう思っているところです。

日本のチェック体制は遅れていた

【遠藤町長】ただ、先ほど欧米とは違うと言いましたのは、日本の原子力行政は、スタートそのものが間違っていたのですよね。国民が大きな不安をもっている、リスクのあるエネルギー源である原子力プラントを、国が事業者から最初から全て任せてきたからです。最初から国がきちっとした保安体制、制度の下、安全の担保をしてくれていなかった。ですから事業者がスタートから情報の隠蔽などの「奢り」という土壌ができてしまった。

フランスにも2回ほど勉強に行ってきました。フランスと日本を比較すると、フランスでは国が中心ですね。国が原子力施設を全てコントロールしています。国民にしっかりと、国が管理しているという大きな裏付け、担保を示しているわけでしょう。ですからプルサーマルを十数基で実施していても安全を国が担保しています。しかも隣国に対して電力の安定供給をしているのではないですか。みんな原子力発電国としてのプライドを持っているのですよね。

日本は技術的には別として、管理体制としては後進国でしたね。それを再三、私は国に言ってきました。今、国は変わってきました。原子力安全・保安院もでき、第三機関のダブルチェッ



遠藤勝也・富岡町長

ク機関もできました。全て私たちが望んでいたことに国が対応しました。それは私が平成14年の9月に要望したことです。国は地方の声を真摯に受け止めたと評価しています。

——地元の方々が原子力発電所でたくさん働いていると思いますが、地元と東京電力との関係では、かなり変化があったと思います。しかし、基本的には、信頼感をもって共存してきたと考えてよいのでしょうか。

【遠藤町長】いろいろ紆余曲折がありました。建設当初、東京電力は地元に対しても理解を得ようという姿勢、謙虚な姿勢があって、住民に対する信頼醸成に一生懸命汗を流してくれました。平成元年、この富岡町にあります第二原子力発電所3号機の再循環ポンプ破損事故がありました。その当時には、建設当時の社員と違って、住民に対するプライド意識が高すぎて、住民との間に相違性が出てきてしまっていたのです。それは奢りですね。地元にはかなりな不満がありました。当時私は町議会議員で、破損事故の時は東京電力が説明会を頻繁に開催し

ましたが、やはり東京電力に対するいろいろな面での不満、不信がありました。それがいろいろな面で反省を促し、それから数年して、ようやく住民との調和が得られるようになってきたのです。それが平成14年に情報の隠蔽がさらけ出される事件がおき、再度ショックを受けました。

もう今後はそのような事はないと思うのです、お互いに全てのハードルを越えてきましたから。今は住民と東京電力の社員との間の不信感はありませんし、東電福島第一、第二原子力発電所で働いている地元の住民は約1万人、それだけの雇用を凶っていたいでいるので、それは大変ありがたいのです。雇用の確保、所得の向上、経済の活性化は、大きな地域振興です。この地域は以前、福島県の過疎地でした。今日のような地域の発展は東京電力の原子力発電所ができたからこそです。感謝しています。今はそのように円滑に進んでいる状況で、私は、このまま今後も推移していくと思います。

——この地域は、日本のエネルギー

の安定供給のための大きな基地の一つですから、プルサーマル計画も進展しているようですし、改めて足下を見直して、これからもなお一層、地元とのより良い関係の促進や、エネルギーの安定供給を図っていく地域となると考えた方がよいでしょうか。

【遠藤町長】 そう思います。私たちどもは事業者と運命共同体で、それが宿命なのです。しかしその宿命をプラスに切り替え、この地域が大きなエネルギー供給基地であることのプライドと誇りを持てるような、そういう地域にしたいですね。それが、これから事業者と共に努力していかなくてはならないことです。またさらに、国がもっともっと国民に対しても地元に対しても、分かり易い広報活動、合意形成活動や、安全性、耐震性も含めて、国が施設をしっかりと担保しているということを説明して、「国がバックにいる」という一つの安心感を与えてくれればと思います。

子供たちに原子力の知識を

——子供達がエネルギーや原子力についての正確な情報を得ることは重要だと思います。東京電力には様々な専門知識や経験をもった社員がいますので、小学生、中学生、高校生と東京電力の方々との教育の場での接点があれば効果的だと思います。実際に理科などの実験に講師として来るなど、子供たちと東京電力の社員との接点がありますか。

【遠藤町長】 それは全くないですね。先日東京に上京した時に、経済産業省の方にお話をしました。それは、小学校、中学校、高等学校の教育の中で、エネルギーそのものについての勉強をさせるべきだということです。原子力は必要不可欠であり、今後の世界中のエネルギー源のエース格なのだと

いうこと、しかしウランは有限であり、その資源を使用後にはリサイクルして大事に使うこと、特に日本の場合は、エネルギー資源がない島国だから、やはりウランは再利用していくシステムが必要で、日本のプルトニウムの余剰を防ぐことでもあるし、それで核燃料サイクルは必要であるということです。このことは教科書では教えてくれません。

それと同時に地元での東京電力との人的交流はもちろんで、学校の勉強の他に、東京電力の社員が子供達の活動にもいろいろ参画して、原子力についての知識を伝えて下されば、地元の教育者ともよく連携して教育も考えて下されば、子供達は原子力発電所に誇りを持てるし、自信も出てくると思います。自分たちも原子力発電所、あるいは原子力に係わりたいと、そういう希望が出てくるのではないのでしょうか。

——最近の「理科離れ」の予防にもなるでしょうし、原子力のことだけではなく、社員と子供との直接的な繋がりができますから、町民と発電所従業員との緊密性が深まるでしょう。また、

子供達との繋がりが社員の教育にもなるのではないのでしょうか。

【遠藤町長】 もう一つ必要なのは、電力生産地と消費地の子供同士の交流、あるいは消費者としての立場と生産地の人との人的交流です。生産地ではある意味でリスクを背負っているわけです。電気を使っている人はそれには全然気がつかないのですよ。その点がこれからの首都圏に対する広報活動として大事だと思います。今までの広報では地元として不満です。私たちが地域だけではないのですが、地方からは電力も水も食料も送っているし、人材も送っている。あるいは空気も浄化して送っているかもしれません。そういうことを、いろいろな面で子供達に勉強させ、あるいは首都圏の大人にも啓発して、感謝するくらいになってもらいたいものです。また、私たちの我々の地域にも滞在して下されると、地域の活性化にもなります。

電気の産地が分かったらいいのに

——電力の大消費地の東京の方々には原子力発電のことをほとんど知らないですね。



【遠藤町長】 私の町と東京品川区とで関係がありまして、防災協定を結んでいます。災害時の相互援助協定です。これは、7年前にニュージーランド大使館で、当時の品川区長と私がお会いしたのがきっかけです。ニュージーランドのオークランド市と品川区、富岡町がそれぞれ姉妹都市であったためです。それで品川区と私どもが防災協定を結び、人的交流をしています。また、いろいろな産物を買ってもらっています。これもいい例ですね。

——食べ物には産地がはっきりしていますからね。電気には色が付いていませんし、産地の表示もないですし、そのようなことも考え、広報していく必要がありますね。

【遠藤町長】 そうです。

——電気はコンセントから出てくるものだと思っている子供達がいまから。停電になって電気のありがたさに気が付くということがままあります。

【遠藤町長】 情報の不正発覚の時に、原子力発電所が止まったでしょう。その時に、「電気を止めてしまったらどうか」という話が地元で出ました。我々の思いを知ってもらおうという、そのような方がたくさんいました。幸いあのときは冷夏でしたが。

——こちらには以前から、まるで当たり前のように原子力発電所があり、子供たちには、原子力発電所はいつもそこに、前からある建物という感じ方だと思うのです。自分の家の近くにある原子力発電所では、電力が作られ、首都圏に送られているということ、たとえば大学に入った子供達が、友達にそのことを話すようになればいいなと思います。

【遠藤町長】 そうですね。やはり子供の教育として、この地域がエネルギーの供給地であることを誇りに思うことです。そういう気持ちがあれば子

供達も堂々と意見交換の時に話ができると思います。まだそこまではいいませんね。

今やこの地域の原子力発電が誇り

——今、新潟の柏崎刈羽原子力発電所は一昨年（2007年7月）の地震の影響で止まっていますが、東京の3分の1の電気が、福島県浜通り産、新潟県柏崎刈羽産であることをもう少しPRしてもらえると、電力も地場産業からの製品のひとつであるという発想が出易いのですが。

【遠藤町長】 電力のベストミックスという言葉があり、我々がベストミックスというと原子力の比率が32～33%とっていました。ところが現在は28%なのだそうです。それは柏崎刈羽発電所が止まっているからです。その分、CO₂も十数パーセント、オーバーしていることとなります。それだけこの地域の原子力発電所は電力供給、地球温暖化防止に貢献しているのです。数字でわかりますよね。今まさに、福島原子力発電所が10基全て円滑に運転されています。これは本当に素晴らしいことです。これは私どもの誇りです。堂々と、私どもの地域で生産された電力が今、首都圏で使っているのですよと胸を張って言えますね。それだけ胸を張って言えるようになったのは、先ほど申しましたように、国にしても事業者にしてもソフト、ハード両面についてしっかりとしたシステムができたということです。



——こちらの小学生、中学生が学校の課外授業などで原子力発電所を訪問することはあるのでしょうか。学校のサークルでも自由に訪問するなどはいなかでしょうか。

【遠藤町長】 あまり聞いたことがありません。大人は見学に行っているようですが、子供はエネルギー館、いわゆるPR館に行って説明を受けて勉強をしていると思います。実際の建屋の中にまで行っているかどうかはわかりません。

——子供でも、発電している所に行ってみることは臨場感があって、大変勉強になるとは思います。

【遠藤町長】 若干あるのかもしれませんが。

——電力会社によってもばらつきがあるのかもしれませんが、子供の立ち入りについて規制をしているところもあるかもしれませんが。

【遠藤町長】 PR館でも十分勉強できますね。東京電力の福島第一発電所の近くにはりっぱな施設があります。



第二発電所にはこの富岡町にエネルギー館があります。模型もあり勉強になります。先日浜岡原子力発電所、玄海原子力発電所にいきましたら、やはり近くに立派な施設がありました。

——各地のそのような施設は、勉強のためだけではなく、観光施設になっています。

【遠藤町長】 そうですね。確かに子供達の勉強は大切ですね。

原子力発電所の廃炉後の方向が見えない

【遠藤町長】 これからの大きな課題として、日本の原子力発電所の高齢化です。35年、40年と経て、発電所にも高年齢化したプラントが多くなりましたね。あと25年、30年が大部分です。もう10年も経つと廃炉という所も出てくるわけです。この課題について私ども地元、国、事業者がしっかりと明快な方向付けについての説明してもらわないと困ります。これが漠然としていては、地元住民にとって「廃炉になったらこの地域の地域振興はどうなるのだろう」とか、雇用の問題を含めて単純な不安が出てきます。

——福島第一原子力発電所の1、2号機が廃炉になりましたら、その跡地に新しい大きな炉を再建しますとか。

【遠藤町長】 そういう指針、方向付けをはっきりと提示して下さればよいのですが、全然出てきていません。何回聞いてもそうです。茨城県東海村の試験研究炉（JPDR）の解体後の跡地は、更地になって炉心のあった場所は芝が植えてあります。そういうことが試験的にされていますので、当然、解体後、放射能の低減の期間が必要でしょうが、その跡地に再建もできますね。

——時間はかかっても、跡地に再度建てるということがはっきりすれば、待っている事は苦にはなりません。そうではなく、新しい発電所も建てないというのであれば、ただ単に放置されていることになるわけで、地元としてはそれでは困りますね。

【遠藤町長】 この地域では10基で909万6,000キロワットを出力しています。私たちは今後もそれだけの役割を持つべきだと思っています。では将来はどういう計画、ローテーションで規模を維持するのかを考えなくては

ならないでしょう。

「リプレイス」という方法が最近いわれていますが、一部の機器、設備を交換して、使える物は使うということか、解体してまたそこに新しい設備を作るということか、分かり難い言葉です。浜岡発電所は1、2号機をやめて、その代わりを増設しますね。廃炉しても、同じ規模、あるいはそれ以上の物を同じ自治体に増設できれば地域振興にマイナスにならないのですが、小さい自治体では、増設の計画なしに廃炉になったら、大規模償却資産税とか、交付金について減ってしまいます。そういうことは不安の元です。

——地場産業としての原子力発電所がこの地域にあるということは、その従業員の育成、メンテナンスや資材などの支援企業の技術の育成、継続性など、きっちりしたものができているわけで、それを存続しないともったいないし、この地域の発電所を減らして、別なところに初めから作るということは無駄な投資にもなることですね。ですから、この地域の資質を大事にしなければいけないのです。

【遠藤町長】 今、東海発電所1号炉を解体しています。もうだいたい解体されたことでしょうか。5年前に訪問したときには解体に着手して間もない時でした。その解体に700億円のお金が投入されています。解体のための雇用の創出もあると説明を受けました。解体もそうですし、建て替えにしてもそうです。実際にどのようなローテーションとなり、どのようになるのか、明快な説明を私どもは受けていないのです。県にしても、私ども自治体にしてもそれが見えないのです。その点は政策として、国が責任をもって「こういう方向ですよ」と説明しないと、いけないと思います。残念ながら国は明快なことは言いません。資源エ

エネルギー庁に質問しても何も回答がありません。「それは事業者が考えることだ」と言います。それでは困ると思います。

発電所の耐用年数は60年…

——原子力利用ほど国策としてはっきりしているエネルギー政策は他にないと思います。不思議なことですね。電力の自由化問題が現実化したころから、原子力政策は、今までとはちょっと違った方向に変化してきたような気がしますが。

【遠藤町長】 そうです。自由化の問題がでてきたころから、公益企業というのが希薄化してきましたね。電力事業者も大変だと思いますよ。国の役割として、国がもっと国民を納得させることができるようなエネルギー政策、原子力政策を明確にする事が大事だと思いますね。少し先のことしか見えないではね。

ヨーロッパ、特にフランスでは、内陸立地が多いので、河川にプラントを作っていますね。廃炉になったもの（現在11基）がそのままですね。異様

です。これは地域振興にはイメージダウンです。ゴーストタウン化しているわけです。そのようなことは私どもの地域ではあり得ません。

——廃炉問題、その後の方針は、自治体当局としては将来の子供、孫達のことになるわけですから、当然明示していただきたいことですね。

【遠藤町長】 そうです。そういう不安を解消していかないと、原子力そのものに対する地域の関心と将来の夢の展望が開けてきません。展望がなければ原子力に取り組む人材が育ちません。現在もそうですね。今、大学の原子力専攻が見直されていますね。以前、原子力科がなくなり、原子力の人材が空洞化してしまいました。昔は原子力工学科という皆さん懂れて、進学しましたが、今は逆ですね。

——この廃炉の問題は、原子力施設立地の各自治体で避けて通れない根本の問題です。

【遠藤町長】 原子力プラントは、税制上の減価償却年数が15年ですね。いまもそうですね。ただ、平成12、13年頃に、東京電力の南社長が当町に

来られた時にこの点について聞いたことがあります。9年前ですが、原子力のプラントの税制上の減価償却年数が15年、資産的にはそうだけれど、実際の耐用年数は何年ぐらい見ているか、高経年化から廃炉になるまで何年先かと聞きました。今までにそのようなことを聞く人はいなかったようです。ちょっと戸惑って「60年ぐらいかな」と漠然と答えられました。それで今、耐用年数は60年となっていますね。それが既成の事実となりました。それでも、第一発電所の1号機は、60年まで20年そこそことなりました。40年経っていますから。

バランスのとれた町づくり

——富岡町は、将来どの様な町になってほしいと思われていますか。

【遠藤町長】 やはり原子力発電所の立地地域の代表として、安全最優先で、事業者と私ども立地地域の住民が信頼を構築しながら共生していく、これが原則です。そうでないとこの地域は成り立っていきません。そのほかに基幹産業の農業を振興していくためにもう一度見直していくことです。第一次産業の農業、このすばらしい自然と生産の財産がありますから、自然を守りながらこれを生かし、住環境を整備し、そして全て、経済、環境、住、教育、スポーツなどのバランスのとれた町にしたい、住んでいてよかったという町作りをしていきたいと思っています。

すでに一部で成果が出ています。中高一貫教育、公立の高校、義務教育の中学の一貫教育で、スポーツに関係した学科があります（国際・スポーツ科）。富岡高等学校が福島県代表となり、昨年12月30日に開催された全国高等学校サッカー選手権大会に参加しました。この高校からゴルフも



富岡漁港（奥が福島第二原子力発電所）

バトミントンも全国大会に出ています。この高校には地元だけではなく、全国各地から夢を持った子供たちが集まっています。教育とスポーツ振興発展のためのこのような取り組みが4年前から始められています。

環境問題でもそうです。家庭から排出される生ゴミ、給食センターやスーパーから出る残渣を集めて、再資源化のための堆肥を作る、その企業を誘致したのが一昨年です。そこで作られた堆肥を地元の農地で使う、いわゆる地産地消、安全・安心の食料を作り、首都圏の方々に買ってもらう。それも町の一つの環境対策です。しかし医療は過疎地なのです。医師の確保を含め、地域医療の充実を図っていかねばなりません。

そして働く場の創設です。働く場が東京電力の原子力発電所だけでなく、新たな企業を誘致して、もっと雇用の創設を図るようにしていきたいと模索しています。住宅団地の増設がまもなくスタートしますので着実に展開

されていくでしょう。この町は山も川も海もあります。海岸線には素晴らしい浜街道を建設中です。東京電力の第二原子力発電所の進入道路にもつながっています。町には漁港があり、海岸線の道路を整備するとともに、町としても海岸のいろいろな観光資源を開発をしていきたい。これも一つの夢ではなく、本格的に始まります。

まだまだいろいろな夢はありますが、背伸びしないで、財政の厳しい中、健全な財政を確立しながら、できるだけ費用対効果を図り、実現していきます。東京電力の大規模償却資産税や、電源立地交付金等々を有効かつ適切に活用し、電源地域としてできるようなハード面、ソフト面の地域開発をしていくつもりです。

福島のパルサーマルはこれから

——エネルギー供給基地の中心として、この地域、そして富岡町には今後ともご協力いただくこととなります。またこの地域は、日本の原子力政策の具

体化の始まりでもあり、中心でもありますので、今後ともよろしくお願ひします。ここの4町には、パルサーマル計画も容認していただきました。やはり福島の原子力発電所がパルサーマルを始めないと、原子力先進国としては旗振りにはならないと思います。日本中の自治体が福島や福井を見ているでしょう。

【遠藤町長】平成10年に、福島にはMOX燃料（ウラン・プルトニウム混合燃料）が搬入されました。それなのになぜ福島がこれだけなぜ遅れたかという、平成14年の事件、後の高浜発電所のデータ改ざん、浜岡発電所の配管問題、東海村のJCO事故もあり、前の福島県知事が「ノー」ということになったわけです。やむを得ませんでしたね。また、新潟の地震もありました。東京電力にとっては条件が悪過ぎましたね。まあこれからです。

JP

いんぷお くりっぶ

六ヶ所再処理工場竣工は8月

この2月に竣工を予定していましたが、日本原燃（株）の六ヶ所再処理工場は、半年遅れの8月に繰り延べとなりました。高レベル放射性廃棄物のガラス固化工程で、ガラスの流下時の不溶解の

具合や溶融炉の復旧を図るためです。ガラス溶融炉の試験再開は5月頃になる予定です。

竣工時期の見直しは、ガラス固化工程の問題で5回目、通算で16回目にな

るとのことです。六ヶ所再処理工場は、わが国の原子燃料サイクルの要の施設です。この際、徹底的なチェック、確実な修復を経て、竣工後は安定した運転を願いたいものです。

浜岡1、2号機運転終了 新たに6号機を建設へ

中部電力（株）浜岡原子力発電所は1～5号機の原子力発電所を運転していましたが、1、2号機の運転を2009年1月30日午前0時に終了しました。今後はこの代わりに6号機を同じ浜岡原子力発電所の敷地内に建設する計画です。浜岡1号機は54万kW、2号機は84万kWで、それぞれ1976年と1978年に運転開始された原子力発電所です。

中部電力では、2005年1月から自主的に、地震動が約1,000ガルでも耐え得るように耐震余裕をさらに高める工事を実施しています。すでに3～5号機においては2008年3月にそのための改造工事を完了しました。しかし、1、2号機については、そのための相

当な工事費用と工事期間が必要であること、工事を実施しても経済的に見合わないとの判断から、1月30日で営業運転を終了する事となりました。今後、1、2号機の燃料の搬出などが進められ、廃止措置が行われます。両機とも運転開始から30年そこそこ、まだまだ働き盛りですが、地震対策上、より安全性が高く、効率のいい原子炉に交替することになったものです。

中部電力は、総発電電力量に占める原子力発電の割合が18%（2007年）と、他の電力会社に比べ低く、昨今の電力の安定供給、地球温暖化防止の重要性から、原子力発電の果たす役割が一層増しているとの認識を強くしていま

す。このため、可能な限り早期に6号機の建設に取りかかることとし、2020年前後の運転開始を目標に計画を進めることになりました。6号機は改良型沸騰水型軽水炉（ABWR）で、出力は140万kW級、着工は2015年を予定しています。6号機1基で、1、2号機の規模を上回る発電量となります。

今回の1、2号機の運転終了に伴い、両機の使用済燃料の搬出のため、発電所敷地内に、新たに使用済燃料貯蔵のために施設（乾式）を2016年度の使用開始を目標に建設することになりました。

安全委 — 柏崎刈羽7号機の安全機能 — 損傷なし

2月18日、国の原子力安全委員会は、経済産業省の原子力安全・保安院の報告による、東京電力（株）の柏崎刈羽原子力発電所7号機に関する設備健全性評価と機能試験評価について、妥当であるとの結論を出しました。2007年7月16日に発生した新潟中越沖地震のために同原子力発電所7基全てが停止していることに対して、7号機に限っていますが、初めてその安全性に対す

る評価がなされたものとなりました。

原子力安全委員会の18日の見解によりますと、「発生した地震の加重が基準の2倍にも達していたものの、耐震設計上重要な施設は、原子炉建屋から配管に至るまでほぼ無損傷だった。設計段階から施設の耐震裕度が確保されていたため、7号機の安全機能は地震によって損なわれることはなかった」と結論づけています。これにより、今

後、地元新潟県が独自に設置した技術委員会の評価と県との了解を得て、7号機の再運転が実施されることとなります。地球温暖化防止のために、1日も早い運転再開が待たれます。

1～6号機の発電設備についても順次評価が続いており、精力的な作業を望むところです。

川内3号機増設申し入れ

九州電力（株）は1月8日、鹿児島県知事と薩摩川内市長に対して、川内原子力発電所3号機の増設を申し入れました。3号機は159万kW、改良型加圧軽水炉（APWR）、建設費5,400億円、計画が順調に進めば、2013年度に着工し、2019年度に運転開始する予定です。

3号機増設申し入れについて九州電力では、エネルギー資源小国であるわ

が国のエネルギー・セキュリティの確保、地球温暖化防止のためのCO₂排出削減のため、積極的に取り組むとしており、その具体的な姿勢を示したものとなっています。地球温暖化ガス削減のためには、原子力発電所の創設が最も効果が高く、しかも大規模な手段として認識され、各国でもその増設が進められていますが、わが国の電力会社

でも積極的な施策の一環として、原子力発電所の増設が進められています。

九州電力は、玄海原子力発電所1、2号機（各55万9,000kW）、3、4号機（各118万kW）、川内原子力発電所1、2号機（各89万kW）が運転中で、川内3号機は7基目となります。

歴史って人間ということ

後藤 茂

五万冊の蔵書で書齋を傾けた平岩外四さんは、無類の読書家であった。死の間際まで読まれていたのが、塩野七生さんの『ローマ人の物語』だったそうである。混迷の時代を迎えて、古代ローマの衰亡に思いを馳せておられたのだろうか。塩野さんの本は棺に納めたと、ご遺族からお聞きした。

もう10年ばかり前、読売新聞が企画した『『二十一世紀への視座』 百人インタビュー』は、それぞれの発言が興味深く、切り抜いておいた。塩野七生さんは最終回に登場しているが、「なぜ、歴史にひかれるのですか」との記者の質問に、つぎのように答えていたのが妙にここに残っていた。

「人間のやること全部に関心があるからです。自分の体験は限られているけれど、歴史を知れば、時代を超えて他人の体験を知ることかでき、人間社会がみえてくる。つまり、歴史って人間ということですよ」

年の暮れのこと、部屋を片付けていて、こんなスクラップブックを取り出したが、このほかにも何冊かの『文藝

春秋』を拾い読みした。著名な執筆陣による「巻頭随筆」が好きで、時折買っていた雑誌である。1981年の1月号に、安岡章太郎の「歴史の手触り」というエッセイがあった。

父方の家のことをある雑誌に連載していると、あとからあとから資料が出てきて整理に困った、という書き出し。「資料といたって歴史家が目がかがやかせるようなものではなく…、手紙や日記の切れ端なども混じっているが、別段、資料的価値というほどのものではない。ただ、そういう昔の書き付けを手にとって見ていると、何でもない文字の中から不意に古い時代が蘇ってくるような気がする」といって、たとえば、

某月某日 サカヤキ致ス

というような簡単な一行があると、

「突然そこに自分の祖先の一人が座って、俯向いて髪をすいていた、剃刀で頭のとっぺんを剃り上げたりしている有様が、何か心の触角にふれたように浮かんできてしまうのだ」

とつぶやき、このような話を綴って

いた。

家の倉の奥座敷の壁紙の下に、慶応二年安岡権馬の日記が貼ってあるのが見つかる。経師屋を呼んで剥がすと古い書き付けが出てきた。六代、七代前の当主宛の手紙や日記が使われている。「そういう一枚一枚の紙を剥がして行くうちに、何か過去の時代の空気がすうっと鼻の先を通り抜けていくようで、過去に酔わされる気分になる。

紙切れは大したことは書かれていなかったが、「この家で権馬を中心にいわゆる古勤王党の郷土たちが何度も会合をひらいている記録や寄附金の名簿が出てきたのは、一応の収穫といえるかもしれない」

と、作家は感慨深げだ。

私は、この随筆を見つけて、ふと、吉川英治が『私本太平記』執筆にあたって足利学校を取材したときに耳にしたという話を思い出した。

昔、文盲の領民が、なにか読めない文字があると、紙キレに書いて門前の小松に結いつけておき、翌

朝を待つと、それにフリ仮名と解釈が付いていたという言い伝えのある“字降松”についての挿話である。

(『随筆私本太平記』)

吉川英治はこうもいっていた。

「史料は少なくない。だが史料の中に埋まってみても、南北朝史の密林は立ち暮れるばかりなのだ。ただ、頼れるものは、六百年前の人間も、近代人も、ともに人間であったということと、人間が作る社会であったということだけだ」。

数年前になるだろうか、せみ時雨に汗の噴出す夏の盛りに、畏友大井昇さんが「こんな絵図を見つけた」と、満面笑みを浮かべて訪ねてきてくれた。見ると、「長崎奉行所露国使節応接之絵図」(嘉永6年8月19日)だ。長崎奉行は畳を数枚重ねた上に座り、ロシア使節は肘掛け椅子に掛けている。大井三郎助は袴姿で、同僚の手附と並んで控えている。天眼鏡でもない読めないほどの小さい字だが、たしかに「大井三郎助」と書かれていた。大井さんは、『幕末外交関係文書』から見つけたと、興奮気味であった。

大井家には『大井譜』という記録が伝わっていたという。曾祖父三郎助の日記で、一見したところ、役所での任命事項などが羅列してあるだけのつまらない書付であった。読みづらい筆あとを追っていると、

嘉永六年七月十七日 露西亜軍艦
四艘渡来二付 右御用取扱掛

という一行が、目に止まった。大井さんは、一瞬、息をのんだと、言葉を弾ませていた。この日はプチャーチンが長崎に来航した日だったからだ。パルラダ号に同行していた作家・ゴンチャロフが書いた『日本渡航記』(岩波文庫)の中に、大井三郎助が出ているのをみつけたのは、後のことである。

この本にサブロスキーとロシア人の名前のように登場していたのである。英語表記ではOye・Sabroskyだ。三郎助が好意的に書かれていて、ロシア人に与えた三郎助の人柄が判る興味深い史料と知り、大井さんを喜ばせた。

大井さんの逸るころは、長崎奉行に仕えて江戸と長崎を6回も往復し、幕末の外交交渉の現場に立ち会った男、大井三郎助を探索する旅へとかりたてたのである。

吉村昭の『落日の宴 勘定奉行川路聖謨』のなかに出ている。

「早飛脚が長崎より到着。その内容に幕閣は動揺した。長崎奉行大沢秉哲は奉行手附大井三郎助らを検使としてロシア艦に派遣し、通訳官ポシエツト少佐と対面した。ポシエツトはプチャーチン中將が幕府あての国書と長崎奉行あての書簡を持ってきたと告げ、検使は奉行あてのみ受けとり、国書を受領するかは幕府の指示を仰ぐ必要があると答え、艦を離れた」。

和田春樹の『開国一日露国交渉』には、総員が甲板にあがって戦闘配置についた状況や、大井三郎助らとロシア

側との会談の様子などがリアルに描写され、「ロシア艦隊の態度はまさに優等生的であった。接触した奉行所の役人たちはすっかりロシア人たちが気に入ってしまった」と書かれていた。

ロシア艦が入港して数日のうちに書いたと思われる大井三郎助らの意見書「長崎奉行手附ヨリ差出候書付」(内閣文庫・国立公文書館蔵)も見つける。長文の「書付」だが、これが実に面白い。徳富蘇峰の『近世日本国民史』にも全文が出ているというが、貴重な史料だと思うので抜粋して紹介しておこう。

「このたびのロシア軍艦の件について、お聞き入れあるなしに拘わらず、皇国の興廃の分かれ道に拘わっていると考え、特別に内密で申し上げる。

今年の夏、アメリカの軍艦が浦賀沖に渡来した理由はアメリカがわが国を犯す謀反であり、ロシア政府はこれを知り、わざわざ軍艦を仕立ててやって来たと推考する。わが国の風俗、人情などを調べるべく蝦夷や江戸湾へ渡来しあるいは漂流に事寄せ、漂流民を送ってきたりして、その都度わが国の風俗人情などを探ってきた。国書を持ってきて返答ぶりに応じて、無理に数艘の軍艦を江戸湾へ押し入り、内海へも自由に乗り入れ、不利な戦争を仕掛け、わが国をすばやく犯すべく、もくろみで来ている。

他方ロシア政府は、あらかじめ予見していた。このたびの來船は、

アメリカがわが国を攻めた場合、日本のために味方をして、アメリカの矛先を取り鎮め、国の安穩を維持し、ロシアはわが国と億万年の信義を結びたいということだ。ロシアより参った使節と軍艦は、大規模であるが無法なことはせず、わが国の法を守るといっている」。

当節は、「字降松」の話のように、紙切れに書いてあちこちの門に結び付けたとて、返事がくるご時勢ではない。しかも大井さんは、ウィーンの国際原子力機関（IAEA）で働いた経験を持つ技術者である。江戸学に興味を持っていたとはいえ、先祖が下級役人の御徒だったその「御徒」すら、どういう身分だったのかよく分からなかった。

まして探す資料は、国立公文書館や各地の歴史文書博物館、大学などに所蔵されている史料だ。これをどのようにして探し出せばいいのか、しかも見つけ出した古文書は難解である。意を決して大学の古文書講座に通い、読み方を学んだ。

吉川英治に言わせれば、「史料の乏しい人物をとらえて書くことは、土中の白骨へふたたび血液を通わせて見る所業にもひとしい」。その足跡は、「雪上の鴻爪」のようなものだ（『随筆宮本武蔵』）。だから、大井さんが様々な文書を読み解き、幕末の外交交渉のなかに、一介の下級役人大井三郎助を立ち上がらせることは大変な苦勞があったことだろう。

大井さんの歴史発掘の行脚は、六年に及んだそうである。弘化4年（1847）に長崎奉行所へ与力として赴任した大井三郎助が、幕末の長崎で繰り広げられた外国との折衝に立ち会っていたことを知った驚きは格別であった。

その感動の思いを書き綴り本にしたのが、『幕臣サブロスキー』—江戸と長崎で終焉を見た男・大井三郎助の生涯—（長崎文献社）である。いただいて一気に読んだ。あらゆる伝記は真実の人生の記録であるというが、そんな感慨を深くさせられた好著であった。

大井さんは当初、曾孫としての軽い興味から調べ始めたそうである。調べているうちに、「三郎助その人の面白さ」に惹かれてのめり込む。三郎助が幕末の歴史的な事件に立ち会っていたのを知ったからである。幕府に出仕したのは、開国がはじまった弘化2年（1845）だった。『大井譜』に、

「安政元年（1854）二月朔日 阿蘭陀国へ御詔蒸気軍艦取扱掛可相勤旨 水野筑後守申渡」

とあった。三郎助はオランダとの艦船購入交渉にかかわっていたのである。安政2年にオランダ国王から幕府への蒸気軍艦献上の道を開いていたのだ。この船を練習船として使用する長崎海軍伝習所が設立され、勝海舟や榎本武揚らが育ったことはよく知られている。さらに安政四年には詔えていた蒸気船ヤーパン号が長崎に着く。万延元年（1860）日米条約批准交換のため、木村攝津守を提督に勝淡路守を艦

長として日本初の太平洋横断を果たした、あの有名な「咸臨丸」である。

なかでも、嘉永6年（1853）の露使節プチャーチン提督との出会いがなければ、『大井譜』もただの紙切れになっていたかもしれない。嘉永7年（1854）、イギリス東インド艦四艘が長崎に入港したのに立会うなど、このころの三郎助の活躍は、目を見張るものがあった。

長崎での初仕事のローレンス号乗組員の座敷牢普請掛は米ペリー総督の来日に繋がっているし、延べ2,100日におよぶ長崎勤めは、ロシア・イギリス・フランス・オランダ等の使節との折衝に当って多忙であった。幕府崩壊による長崎奉行所の終焉を見届ける、まさに日本という国の歴史的転換期にめぐり合った人物の人生を、大井さんは掘り起こしていたのである。

江戸時代といわれる日本は、長期間に亘る鎖国であった。しかし、幕末を迎えてこの島国を取り巻く雲行きは怪しくなってくる。函館、江戸、長崎などに黒船が来航するようになったからだ。攘夷、開国と国論が渦巻くなかで、平和を護りえた。大きな組織の、ほんの小さな歯車であったであろう大井三郎助のような人間がいたのだ。

国を開いてから、くりかえし戦争をしてきたのはなんとも皮肉である。あらためて、「歴史って人間ということ」を考えさせられたのであった。

（元衆議院議員）

発行日/2009年3月13日

発行人/西澤 潤一

編集人/後藤 茂

社団法人 原子燃料政策研究会

〒102-0083 東京都千代田区麹町1丁目3番23号
麹町1丁目3番地ビル501

TEL 03 (3239) 2091

FAX 03 (3239) 2097

ホームページ  <http://www.cnfc.or.jp>

会 長

西澤 潤一 首都大学東京 学長

副会長

津島 雄二 衆議院議員

理 事 (五十音順)

今井 隆吉 元国連ジュネーブ軍縮会議
大使

大島 理森 衆議院議員

大畠 章宏 衆議院議員

木村 太郎 衆議院議員

後藤 茂 元衆議院議員

田名部 匡省 参議院議員

中谷 元 衆議院議員

山本 有二 衆議院議員

渡辺 周 衆議院議員

監 事

浅野 修一 公認会計士

下山 俊次 核物質管理学会
日本支部前会長

デザイン/キュービシステム株式会社

印刷/アサヒビジネス株式会社

— CNFC Information —

事務所移転のお知らせ

当原子燃料政策研究会は、設立当初より国会議事堂及び衆・参の議員会館に近い千代田区永田町に事務所を置いておりましたが、都合により、この度、皇居半蔵門のすぐ傍、千代田区麹町に移転いたしました。

今まで同様、新事務所もよろしくお願いいたします。

◎新住所

〒102-0083 東京都千代田区麹町1丁目3番23号 麹町1丁目3番地ビル501

TEL 03 (3239) 2091 FAX 03 (3239) 2097

編集後記

◆1月20日、米国に、バラク・オバマ大統領が誕生しました。オバマ大統領には、地球全体のことを考え、すでに使用することができない核兵器を廃絶する姿勢を早い時期に示してくれることを期待しています。また環境問題に対応するため自国での取り組みだけではなく、気候変動枠組条約への加盟も期待したいと思います。

◆花粉症の季節がやってきました。春といえども、花粉症でお悩みの方々には、つらい季節です。花粉症の原因で代表的なのは、スギの花粉の飛散ですが、近年花粉症の方々が増加している背景には、この飛散量の増加に加えて、排気ガスの増加なども複合的に影響しているともいわれています。まだはっきりしたことはわかっていません。いずれにしても、花粉症の問題をとっても、環境保全が重要であることは明らかです。

◆今年1月末に、長年住み慣れた「永田町」を離れ、同じ千代田区の「麹町」に移ってきました。永田町と一転して違うのは、皇居半蔵門が目の先というのに商店が多いことです。千代田区のホームページによれば、半蔵門を背にして右手「番町」に旗本、左手「麹町」に大名屋敷があったとのこと。そして麹町1丁目から始まる麹町通り(現在の新宿通り)沿道には、武家屋敷の御用を調達する商家が並んでおり、江戸の町屋では最も古い地域の一つであったとされています。

◆この麹町は、武家屋敷と町人の町が隣り合っていたところで、現在も国会、官庁に近く、最高裁判所(隣の隼町)、各国大使館、地方自治体の事務所などと商業地区が混在した地域となっています。飲食店も多く、庶民的な価格にほっとしています。

